

アルテス リベラレス

岩手大学人文社会科学部紀要

第 113 号 2023 年 12 月

目 次

奥野 雅子：心理臨床家の死生観が援助のあり方に与える影響 —有資格者のカウンセラーを対象にした調査から— ……………	1
木村 直弘：TVドラマのartification ——『あまちゃん』第152回を例に—— ……………	19
斎藤 伸治：ジョーゼフ・キャンベルの「聖杯の神話」について……………	59
Jim SMILEY：ゲームを通じた言語推論教育：レベルと態度の調査 ……………	71
樋口 知志：藤原基衡論……………	87
本村 健太：ハプティック・ヴィジュアルな構成学に向けて —バウハウスの脱神話とヨハネス・イッテン— ……………	119
岡部 祐佳：『宇津山小蝶物語』翻刻（二）……………	133
鋤田 智彦：大阪大学所蔵『満文西遊記』回目……………	159
長谷川 弓子：Does distance perception ability of golfers affect their motor control: An attempt to measure individual distance perception using a visual analog scale ……………	179
齊藤 彰一：マルクス労賃論にかんするサーヴェイ —正統派と宇野派の到達点— ……………	197
塚本 善弘：流域連携・交流に基づく環境保全・防災とコロナ禍 —北上川水系周辺の最新動向から— ……………	209
丸山 仁：サステナブルツーリズムという希望 —持続可能な地域社会の実現に向けて— ……………	233
高橋 宏一：岩手県における伝統的民家の間取りの成立・発展と地域的展開 —3列型を主に—（Ⅱ）……………	253
大川一毅・大野賢一・畷田敏行：大学における校風認識とその継承期待をめぐる 調査考察（全国大学関係者アンケート結果を踏まえながら）……………	271

大学における校風認識とその継承期待をめぐる調査考察 (全国大学関係者アンケート結果を踏まえながら)

大川一毅*・大野賢一**・寫田敏行***

1. はじめに

(1) 大学校風への着眼

今日における大学がさらなる発展・機能強化を目指すにあたり、卒業生や保護者など大学と極めて近い関係にある「外部構成員」による物心両面の支援が重要であると本稿に関わる研究者らは認識し、これまで科学研究費助成事業として「大学における卒業生サービス研究(2011～2014)」、「卒業生組織(同窓会)の母校在学学生支援研究(2015～2018)」、「教育後援会(保護者会)の事業成果研究(2019～2023)」等に取り組んできた¹⁾。これら研究の過程を通じ、さらに「大学における校風が大学事業や大学支援のあり方に様々な影響を与えている」という新たな知見を得た。

校風について、大学に関わる者の多くが何らかの形でこれを語る。そうでありながら、校風はわが国高等教育研究の題材としてこれまで看過されてきた。校風は建学の精神や教学理念等とは違って明文化されることはない。校風の語られ方も多様である。大学の校風に関わる研究事例が少ないことの原因には、こうした校風の曖昧さ、実質としての捉えにくさにもあろう。ならば校風の内容項目や要素を具体的に把握することはできないか。それを検証可能な指標に置き代えて大学評価に活用にはできないか。こうした研究課題に行き着いた。この設定課題に取り組むべく、「大学校風」を検討の対象に据え、校風をめぐる実態を明らかにしながら「大学の個性化・活性化」を導く大学評価のありかたを模索する科研費研究を2022年度に開始した²⁾。本稿はその研究の一環として報告するものである。

*岩手大学評価室

**鳥取大学学長室

***茨城大学全学教育機構

1) これまで本稿研究者らが実施してきた本稿に関わる科研費研究は以下のものである。①「地方大学における「卒業生サービス」の意義と可能性に関する実証的研究」、課題番号23531103, 基盤研究(C), 2011年4月～2014年3月, ②「大学の持続的発展に資する校友(大学・学生・卒業生)事業の意義と可能性に関する研究」、課題番号15K04340, 基盤研究(C), 2015年4月～2018年3月, ③「大学教育後援会の事業と成果を指標として実施する大学評価の可能性をめぐる実証的研究」、課題番号19K02855, 基盤研究(C), 2019年4月～2022年3月。

2) 本稿は2022年に採択されたJSPS科研費「『大学校風』の指標可視化と大学評価への活用に向けた実証的研究」基盤研究(C), 課題番号22K02705, 研究代表者:大川一毅, 研究分担者:大野賢一, 寫田敏行, 山本尚史, 井上美香子, 2022年4月～2025年3月, の一環として報告するものである。

(2) 大学校風に関する研究について

校風をテーマとしたわが国高等教育研究はきわめて少ない。旧制高等学校の校風を扱った歴史研究³⁾や志願者マーケティングのための民間教育情報企業による「校風ブランド調査」等の営利事業はある。あるいはcollege impact研究として、大学における「教育・学習」外の文化や活動経験が、学生個々の価値観やキャリアの形成にどう関わっているか、という研究も内外で行われてはいる⁴⁾。しかし大学校風を研究の主題に据え、これを大学運営や教学マネジメントなど今日的課題と結びつけた研究事例を聞くことはない。こうした状況をふまえ、科研費による前述の校風研究に着手した。これにあたり、まずは基礎的調査として、2022年3月現在の国公立全788大学ホームページを検証し、そこから校風に言及した事例を抽出し(総数543項目)、それら校風がいかなる「語彙(キーワード)」にあわせて語られているかをテキスト分析した。さらに誰が、どのように校風を語っているかも把握した(以後「2022年web調査」という)⁵⁾。この調査分析結果を基礎として、翌2023年3月に全国大学の教員、職員、卒業生組織関係者、保護者組織関係者等に「大学校風をめぐる意識調査アンケート」を実施した(詳細後述)。本稿はその回答集計を報告し、考察するものである。

(3) 校風と大学活性化の関係(本研究とその調査にあたっての基本的考え)

どの大学にも「校風」がある。学生にとってポジティブ(建設的・積極的)に感じられる校風は、大学諸活動の実践意欲を促進し、これら経験による満足度の蓄積が大学への帰属意識も高める。そうした校風を学生に感じさせる大学は、志願者にも魅力的(進学誘因力)に映ろうし、卒業生にとっては誇り(母校支援誘因力)となる。各大学が実施する志願者調査や新入生調査をみるならば、志望理由・入学動機の回答を求めるときに、選択肢として「校風」と「大学の雰囲気」とを同義づけた項目を並列提示する事例も多い。また、大学の社会的評価にあって、各大学の校風イメージが影響していることは多くの者が経験的に認識している。それらもふまえ、もし大学が自らの魅力強化に向けた事業を意図するとしたら、校風を基盤とした施策ならばその実行可能性は高いだろうし、参加者の意識共有も容易である。歴史を重ね独自の伝統や人脈を有する大学だけではない。開学まだ浅い大学であっても、校風づくりに連なる事業は学生・教職員・校友・保護者が、それぞれの立場で関与しうる行動目標となる。校風と関わる事業は、同窓会(卒業生)や教育後援会(保護者)にとって母校支援や互恵的協働の強い動機付けとなることは、筆者らが取り組んできた科研費研究のヒアリングでも把握している。

(4) 「校風」とは(今回調査・報告にあたっての「校風」定義)

本研究にあたり、「大学校風とはその大学独自の雰囲気や気風を言うこととする」と定義した。その上で「校風は建学の精神と関わりながらも同一ではない。校風は歴史的伝統、地理的環境などにも影響を受け、大学の様々な構成員により世代にわたって可塑的に醸成・継承さ

3) 旧制高等学校の校風を題材とした研究には「高橋左門『旧制高等学校研究(校風・寮歌論編)』、昭和出版、1978年」がある。

4) たとえば武内清「学生文化の実態と大学教育」(日本高等教育学会編「高等教育研究」第11集、7~23頁、2008)を見るならば、そこにcollege impact研究の現況をまとめており、さらに昨今大学における学生文化の実態とそれが学生の発達成長に与える意味について考究している。

5) 以下、本稿記載の「2022年web調査」に関しては「大学における校風形成要素の抽出と可視化の試み—独自の大学価値確認と創出にむけて—」大川一毅・大野賢一・嵩田敏行、アルテス・リベラレス(岩手大学人文社会科学部紀要)第111号、283頁~304頁、2022年12月、を参照されたい。

れ、ときに刷新される」と説明を加えた。あわせて「校風は大学をある方向性に動かしていく自覚的・無自覚的な働きであり、その大学たらしめるアイデンティティともいえる」と補足した。本稿でもこの考えで論を進めたい。

2. 大学校風をめぐる意識調査の実施

(1) 実施目的と調査の内容・方法

前述「2022年web調査」で抽出した校風要素項目について、その妥当性を大学関係者による認識状況の実際で検証確認するため、2023年3月に「大学校風をめぐる意識調査（アンケート）」を実施した。

調査は、全国国公私立すべての大学広報担当777部署、校友会（同窓会）643事務局、教育後援会（保護者会）534事務局などに回答を依頼した。送付先にかかわらず回答者及び回答者数は任意とし、組織としての見解ではなく、回答者それぞれの主観による応答を要望した。回答依頼にあたっては、調査実施文書と回答用紙を依頼先に郵送し、webオンライン回答、電子メール返信回答、紙面返送回答のいずれも可とした。回答は無記名とし、同一組織からの複数回答もむしろ推奨した。締め切りは同年4月末日に設定し、期日までに355件の回答があった。

設問の内容は、①回答者とその大学の情報（個人名や大学名を特定しうる質問は無い）、②校風要素の認識とその実感機会を確認する設問（選択肢回答）、③継承してほしい校風、及び校風を活かした大学運営の教示を求める設問（自由記述）、④校風要素「自由」に対する考えや経験教示を求める設問、の4区分内容である。本稿では主として②及び「自由記述」に関する集計報告と分析考察を行う。②の設問では「2022年web調査」で把握した「校風要素（項目）」を提示し、自学で感じる強度やそれら校風項目の形成に影響すると考える要因について「選択5件法」と「自由記述」で回答を求めた。具体的設問は下段URLを参照されたい⁶⁾。

なお、今回本稿が報告する調査は、大学校風を主題とした初めての全国調査と位置づけられる。

(2) アンケート調査の回答状況

今回の調査における回答者（総数355）の半数強が大学職員（202件）であり、大学教員（64件）及び卒業組織関係者（64件）はそれぞれ全体の2割を占めた。保護者組織の回答は14件で少なかった（表1）。「その他」は学生、あるいは卒業生（同窓会関係者以外）である。回答者が関与する大学は、国立大学が100、公立大学が55、私立大学が200、大学の規模として国立大学は中規模大学、公立大学は小規模大学、私立大学は中・小規模大学の回答者が多かった（表2）。

表1 アンケート回答者

	大学教員	大学職員	卒業生組織	保護者組織	その他	総計
国立大学	34	46	12	回答無し	8	100
公立大学	5	28	15	6	1	55
私立大学	25	128	37	8	2	200
総計	64	202	64	14	11	355

6) 「大学校風をめぐる意識調査（アンケート）」 <http://iir.ibaraki.ac.jp/alumni/>（2023年10月閲覧）

表2 アンケート回答者が関与する大学の規模

	大規模大学	中規模大学	小規模大学	総計
国立大学	8	72	20	100
公立大学	2	12	41	55
私立大学	31	91	78	200
総計	41	175	139	355

3. 大学校風をめぐる意識調査の結果と考察

(1) 「校風」として認識する項目

今回調査にあたっては、「2022年web調査」で抽出した校風項目のうち、上位51語彙（項目）を設問に援用した。まずこれら校風項目について、大学教員、職員、卒業生組織関係者・卒業生、保護者会関係者はどのように実感しているのか、その強度を確認した。これにあたり、各項目について「5：強く感じる 4：感じる 3：どちらともいえない 2：あまり感じない 1：感じない」の選択5件法で回答を求めた。そのうち「5」と「4」を肯定的回答とし、その集計結果を表3で示す。

表3 肯定的回答比率が高い校風項目（回答数355）
 （着色している項目は、後述する「回答者属性別回答」の結果項目と重複するもの）

認識する校風要素	回答数	回答比率	順位
学生を大切にする	286	81%	1
教員と学生の距離が近い	280	79%	2
地域や社会との関係が強い	267	75%	3
誠実・実直(真面目・地道)な気風	256	72%	4
のんびり、穏やかな気風	255	72%	5
家庭的、アットホームな雰囲気	242	68%	6
おおらかな気風	236	66%	7
あたたかさ、ぬくもりがある	228	64%	8
明るい気風	227	64%	9
静かで落ち着いている	225	63%	10
価値観が継承されている	221	62%	11
学生が伸びていく	219	62%	12
自由である	216	61%	13
主体性を尊重する	216	61%	13
勉学に熱心	213	60%	15
教育重視の気風	211	59%	16
学生が元気である	204	57%	17
保守的な気風	200	56%	18
努力する気風	194	55%	19
独自性がある(ユニーク)	193	54%	20
友人、先輩・後輩が増える	193	54%	20
職業志向の雰囲気がある	190	54%	22
挑戦・探求を尊重する	188	53%	23
建学者の存在感がある	184	52%	24

(回答比率について、小数点以下での多寡があるので、同じ数値でも順位が異なる場合がある)

全体において回答比率が高かった校風項目（強く感じる「校風要素」）は、「学生を大切に（81%）」、「教員と学生の距離が近い（79%）」であった。「地域や社会との関係が強い（75%）」、「誠実・実直な気風（真面目・地道）（72%）」、「のんびり、穏やかな気風（72%）」なども校風として認識される度合いが強い。校風は大学によってそれぞれではあるが、回答比率の高い項目は多くの大学で共通している校風だとも言える。

「2022年web調査」にて、最も多く抽出された校風要素（語彙）は「自由」であった。これに「学生」、「尊重、大切、重要、重視」、「自主、自発、自律」、「育成、育てる、培う」、「創造、作る、生み出す、生む」、「勉強、学習、学問、まなび、学ぶ」、「雰囲気」、「先生、教員、教授」等の語彙・語群が上位項目であった⁷⁾。今回調査結果を見るならば、「自由」という校風実感の回答比率が61%はあったものの、最上位回答ではなかった。この他「2022年web調査」時の抽出上位項目であった学生指導や支援に関すること、教員との距離感、学習環境の良さ、等に関わる校風諸項目については、今回も実感する校風として回答比率上位であった。大学ホームページは広報機能の役割も担う。そこで多く言及されていた校風は、大学関係者に「好ましく」認識されていると考えてよからう。今回調査で肯定的回答比率が高かった項目が大学ホームページ抽出校風と重複が多いのであれば、それら校風も「好ましい」と認識実感されているに違いない。それぞれ大学に回答上位のこれらの校風が備わっているならば、ステー

表4 否定的回答比率が高い校風項目（回答数355）

認識しない校風要素	回答数	回答比率	順位
芸術尊重の雰囲気がある	175	49%	1
先進、進取の気風	139	39%	2
国際性(グローバル感)がある	129	36%	3
気品がある。洗練されている	119	34%	4
建学者の存在感がある	109	31%	5
研究重視の気風	109	31%	5
質実剛健な気風	97	27%	7
礼儀作法、マナーを重視	86	24%	8
母校愛、一体感がある	80	23%	9
創造力がある	79	22%	10
独自性がある(ユニーク)	73	21%	11
活気や賑わいがある	72	20%	12
開放的である	72	20%	12
職業志向の雰囲気がある	69	19%	14
価値観が継承されている	64	18%	15
挑戦・探求を尊重する	62	17%	16
多様性(ダイバーシティ)を尊重	62	17%	16
学生に個性がある	60	17%	18
教育重視の気風	48	14%	19
自由である	47	13%	20
努力する気風	46	13%	21
勉学に熱心	44	12%	22
主体性を尊重する	42	12%	23
おおらかな気風	41	12%	24

7) 前述大川他「アルテス・リベラレス」111号、286～287頁

クホルダーの満足感が高まろうし、そうした校風の周知は志願者確保にも有効だろう。

一方、否定的回答比率が高い校風項目として、「芸術尊重の気風がある（49%）」、「先進、進取の気風（39%）」、「国際性（グローバル感）がある（36%）」、「気品がある。洗練されている（34%）」などが上位である（表4）。しかし見方によれば、もし、これら校風を認識できる大学ならば、それはその大学の特色・個性にもなりうる。校風は他の大学と違ってのことこそ、独自性として意味がある。昨今、多くの大学は「国際・グローバル化」の推進に力を入れている。ただし、今回回答結果からみれば「国際・グローバル」がその大学の校風として実感できるとの回答比率は低かった。とはいえ、その校風が定着していないからといって、それが大学としての「欠陥」というわけでもない。自らの大学に希薄な校風について、何らかの施策で強化を図るのも一案であろうが、そうではなくて、すでに備わっている校風を基底とした施策に注力推進するのも、その実行と達成の可能性は高まろう。

(2) 回答者別結果

① 教員による回答

校風項目の認識について回答者別に集計してみよう（表5）。まず教員回答からみると、「学生を大切にする（77%）」、「教員と学生の距離が近い（73%）」、「学生が伸びていく（61%）」などの回答比率が高かった。これらは平素の教育活動や学生指導・支援の側面から認識しうる校風である。そうした教学的側面で、教員もまさに校風形成を担っているといえよう。また「のんびり、穏やかな気風（73%）」、「静かで落ち着いている（72%）」、「家庭的・アットホームな雰囲気（61%）」、「おおらかな気風（59%）」、「誠実・実直（真面目・地道）な気風（59%）」など、学生と接する日常からの印象も校風としての認識比率が高い。この他、「地域や社会との関係が強い（67%）」の回答比率も高いのは、教員が地域や社会と関わる研究や事業への参画が多いゆえの校風印象だろうか。

これら教学的側面の校風項目が、大学のステークホルダーである学生、保護者、志願者、あ

表5 教員回答による肯定的項目（回答数64）

認識する校風要素	回答数	回答比率	順位
学生を大切にする	49	77%	1
のんびり、穏やかな気風	47	73%	2
教員と学生の距離が近い	47	73%	2
静かで落ち着いている	46	72%	4
保守的な気風	44	69%	5
地域や社会との関係が強い	43	67%	6
家庭的、アットホームな雰囲気	39	61%	7
学生が伸びていく	39	61%	7
おおらかな気風	38	59%	9
誠実・実直（真面目・地道）な気風	38	59%	9
教育重視の気風	36	56%	11
職業志向の雰囲気がある	36	56%	11
勉学に熱心	35	55%	13
自由である	34	53%	14
独自性がある（ユニーク）	34	53%	14
価値観が継承されている	32	50%	16
明るい気風	32	50%	16

るいは地域社会のニーズと合致しているならば、その校風維持に勉めることは教員の責務となり、それが大学の「強み」につながる。ステークホルダーからの認知度が低ければ喧伝強化も必要だろう。

②大学職員による回答

今回調査でもっとも回答数が多かったのは大学職員である。大学職員も「学生を大切にする(84%)」、「教員と学生の距離が近い(81%)」など大学教員と同様に教学的側面の校風を認識する回答比率が高い(表6)。また「地域や社会との関係が強い(76%)」の回答比率も高い。さらに「価値観が継承されている(64%)」の回答比率は6割を超え、「建学者の存在感がある(55%)」の回答比率も5割を超えるなど、これら項目は教員よりも回答比率が高い。大学の「理念・ミッション」や「建学精神」、「価値観の継承」等に関わる校風認識は、後掲する自由記述を見ても、教員より職員の方が敏感である。大学における理念や建学精神などの継承・維持には、大学職員が重要な役割を果たしていると考えてよかろう。大学職員は、その大学の出身者が多いこともこの回答傾向に影響しているかもしれない。

表6 大学職員回答による肯定的項目(回答数202)

認識する校風要素	回答数	回答比率	回答順位
学生を大切にする(指導、支援)	169	84%	1
教員と学生の距離が近い	164	81%	2
地域や社会との関係が強い	153	76%	3
誠実・実直(真面目・地道)な気風	145	72%	4
家庭的、アットホームな雰囲気	144	71%	5
のんびり、穏やかな気風	136	67%	6
あたたかさ、ぬくもりがある	133	66%	7
おおらかな気風	132	65%	8
価値観が継承されている	129	64%	9
明るい気風	127	63%	10
学生が伸びていく	125	62%	11
主体性を尊重する	122	60%	12
学生が元気である	122	60%	12
教育重視の気風	121	60%	14
勉学に熱心	118	58%	15
静かで落ち着いている	116	57%	16
自由である	115	57%	17
挑戦・探求を尊重する	112	55%	18
保守的な気風	112	55%	18
努力する気風	112	55%	18
建学者の存在感がある	111	55%	21

③卒業生組織(同窓会・校友会)による回答

卒業後の社会人生活を踏まえて大学での諸経験を回顧し、その上で距離を置いた立場から大学校風を認識できるのが卒業生である。卒業生や卒業生組織は母校の校風を社会に伝播する役割を担い、社会からは卒業生自身が「大学校風」そのものに見られることもままある。卒業生や卒業生組織が語る大学校風と、そこで示される形成要素(校風形成の背景、要因)に耳を傾けることは、大学の「強み(あるいは改善点)」の理解となり、大学運営に資する場合が多い。

こうしたことを認識しながら、今回調査では卒業生を代表する組織として、同窓会・校友会事務局にも回答を依頼した。

表7にて卒業生組織の校風意識回答を確認するならば、「誠実・実直（真面目・地道）な気風（83%）」、「地域や社会との関係が強い（83%）」、「教員と学生との距離が近い（83%）」、「明るい気風（81%）」、「学生を大切にする（80%）」、などが回答比率80%を超える。「のんびり・穏やか（77%）」、「おおおらか（75%）」、「あたたかさ・ぬくもり（73%）」、「活気や賑わいがある（61%）」など大学の雰囲気や日常環境に由来する校風や、「友人、先輩、後輩が増える（73%）」といった校風、あるいは「家庭的・アットホームな雰囲気（70%）」という校風も回答比率上位にある。自由記述には「在学中、教職員が優しく、あたたかい学校だと感じていた。その雰囲気はそのまま校風にもなっており、現在通っている学生たちも感じていると思う。（大学職員、私立小規模女子大学）」という記載があった。

卒業生組織の校風認識として「自由」の回答比率も教員や職員の回答に比べて高い（73%）。「2022年web調査」でも卒業生は校風言及にあたって「自由」について語ることが多かった。この他、同窓会・校友会組織ゆえに、「価値観が継承されている（75%）」、「母校愛、一体感がある（67%）」、「建学者の存在感がある（63%）」といった校風実感も回答比率上位だった。

なお、卒業生組織の回答比率最上位だった「誠実・実直（真面目・地味）な気風」について言えば、必ずしも志願者や社会一般の注目を浴びる校風ではなかろう。しかし「2022年web調査」でも「誠実・真面目な校風を重視して進学を決めた」という言及を複数抽出した⁸⁾。学習や研究にあたり、誠実・真摯な姿勢を重視する学生や志願者にとってこうした校風は魅力的に映ろうし、社会もこれを評価する。もし自学に「落ち着いた校風」や「勤勉・誠実な校風」があるならば、これを大切にしていくことは「教学マネジメント」として重要である。卒業生組織関係者からの回答にも次の自由記述が付されていた。

母校前身は旧制高校でしたが、キャンパスも移動してしまい、歴史的なつながりがある校風（たとえば校歌を宴会のときに歌ったりする行為）はなくなってしまったように思っています。一方、勤勉さや誠実さなど、人として大切なものは校風として引き継がれていると思います。（卒業生組織関係者、国立中規模大学、旧制大学として戦前に設置）

保護者組織からの回答は14件であったため、結果概要のみを報告する。回答比率が高かった項目は「のんびり、穏やかな気風（86%）」、「学生を大切にする（79%）」、「教員と学生の距離が近い（79%）」、「自由である（71%）」、「教育重視の気風（71%）」、「誠実・実直な気風（71%）」などが上位項目である。一方、校風として実感しにくい項目として「芸術尊重の雰囲気（57%）」、「開放的（36%）」、「国際性（グローバル感）がある（36%）」などが上位3項目であった。

(3) 大学設置別回答結果

回答者が関わる大学を設置別に分類して認識校風項目回答を集計したのが表8である。国立大学関係者では「静かで落ち着いた（78%）」、「学生を大切にする（74%）」、「地域と社会との関係が強い（75%）」、「のんびり、穏やかな気風（73%）」等が回答比率7割以上である。表中掲載はないが、認識が低い校風項目として「芸術尊重の雰囲気がある（81%）」、「建学者

8) 前掲大川他「アルテス・リベラレス」111号、294頁

表7 卒業生組織回答による肯定的項目（回答数64）

認識する校風要素	回答数	回答比率	順位
誠実・実直(真面目・地道)な気風	53	83%	1
地域や社会との関係が強い	53	83%	1
教員と学生の距離が近い	53	83%	1
明るい気風	52	81%	4
学生を大切にする(指導、支援)	51	80%	5
のんびり、穏やかな気風	49	77%	6
価値観が継承されている	48	75%	7
おおらかな気風	48	75%	7
自由である	47	73%	9
あたたかさ、ぬくもりがある	47	73%	9
友人、先輩・後輩が増える	47	73%	9
主体性を尊重する	46	72%	12
勉学に熱心	46	72%	12
家庭的、アットホームな雰囲気	45	70%	14
静かで落ち着いている	45	70%	14
学生が伸びていく	44	69%	16
母校愛、一体感がある	43	67%	17
建学者の存在感がある	40	63%	18
独自性がある(ユニーク)	40	63%	18
学生が元気である	40	63%	18
教育重視の気風	39	61%	21
活気や賑わいがある	39	61%	21

の存在感がある(80%)」、「先進、進取の気風がある(65%)」、「気品がある。洗練されている(66%)」等が上位項目だった。

公立大学関係者は「学生と教員の距離が近い(84%)」、「地域と社会との関係が強い(82%)」、「学生を大切にする(82%)」、「静かで落ち着いている(76%)」、「のんびり、穏やかな気風(73%)」など、こちらも学生と教員との距離の近さや地域社会との関係性といった校風認識が強く、国立大学関係者回答と相似する。認識が低い項目は「芸術尊重の雰囲気がある(73%)」、「建学者の存在感がある(60%)」、「国際性(グローバル感)がある(60%)」などが上位であった。

私立大学関係者回答でも「学生を大切にする(84%)」、「教員と学生の距離が近い(83%)」が上位項目だった。「建学者の存在感がある(75%)」、「家庭的、アットホームな雰囲気(75%)」、「地域や社会との関係が強い(73%)」、「価値観が継承されている(74%)」などの校風認識に肯定回答比率が高かった。認識が低い上位項目は「芸術尊重の雰囲気がある(64%)」、「先進・進取の気風(56%)」、「研究重視の気風(56%)」等があがった。

これら設置者別回答比率を見るならば、認識肯定的項目にしても、認識否定的項目にしても、国公立大学の校風として一般的にイメージされがちな「ステレオタイプ(典型)」に近いかもしれない。しかし、たとえ設置類型の「典型的校風」だったとしても、それはそれで重要なことである。その校風が大学それぞれの個性に他ならない。その校風を活かすことが肝要である。

表8 国公立回答者別比率（回答総数355、7割以上の回答比率を着色）

強く認識する校風要素	全回答件数	全回答比率	順位	国立100	公立55	私立200
学生を大切にする(指導、支援)	286	81%	1	74%	82%	84%
教員と学生の距離が近い	280	79%	2	69%	84%	83%
地域や社会との関係が強い	267	75%	3	75%	82%	74%
誠実・実直(真面目・地道)な気風	256	72%	4	74%	69%	72%
のんびり、穏やかな気風	255	72%	5	73%	76%	70%
家庭的、アットホームな雰囲気	242	68%	6	52%	75%	75%
おおらかな気風	236	66%	7	63%	58%	71%
あたたかさ、ぬくもりがある	228	64%	8	49%	53%	71%
明るい気風	227	64%	9	50%	67%	70%
静かで落ち着いている	225	63%	10	78%	76%	53%
価値観が継承されている	221	62%	11	39%	64%	74%
学生が伸びていく	219	62%	12	47%	60%	70%
自由である	216	61%	13	58%	60%	63%
主体性を尊重する	216	61%	13	49%	73%	64%
勉学に熱心	213	60%	15	68%	75%	52%
教育重視の気風	211	59%	16	56%	64%	60%
学生が元気である	204	57%	17	48%	42%	67%
保守的な気風	200	56%	18	22%	40%	58%
努力する気風	194	55%	19	55%	64%	52%
独自性がある(ユニーク)	193	54%	20	51%	53%	57%
友人、先輩・後輩が増える	193	54%	20	47%	45%	61%
職業志向の雰囲気がある	190	54%	22	45%	55%	58%
挑戦・探求を尊重する	188	53%	23	49%	55%	55%
建学者の存在感がある	184	52%	16	54%	33%	75%

4. 校風を形成する要素・要因

(1) 全体回答

これまでの調査集計をふまえ、大学校風の項目輪郭はおおよそ見えてきた。ならばこれら校風がどのような要素・要因で形成されるのか。調査では校風形成に影響すると考えられる背景(要因)を34項目提示し、選択5件法で回答者にその要因強度の認識回答を求めた。

全体回答結果(表9)を概観すれば、「大学の立地(81%)」の回答比率がもっとも高く、「キャンパスの景観(67%)」の回答比率も高い。この結果には着目しておきたい。また「教員と学生の距離の近さ(78%)」、「学生同士の交流(67%)」、あるいは「地域の人々との交流(63%)」といった回答比率も高く、人的交流要因も校風形成に大きく関与すると認識されてい

表9 校風を形成する要素・要因(回答数355、回答比率50%以上を掲載)

順位	校風形成の影響要因	件数	割合
1	大学の立地(分散、統合、所在地、など)	289	81%
2	教員と学生との距離の近さ	277	78%
3	キャンパスの景観	237	67%
3	学生(友人、上級生・下級生)同士の交流	237	67%
5	地方大学である	226	64%
6	地域の人々との交流	225	63%
7	実学教育を重視	219	62%
8	地域内、県内の出身学生数	209	59%
9	教育・研究施設の状態	208	59%
10	資格取得教育を重視	207	58%
11	卒業生の母校意識	193	54%

る。これら要素に関する自由記述も多かった。「地域内、県内の出身学生数（59%）」は、立地と人的交流の両要素に関わる要因認識といえよう。「実学教育を重視（62%）」、「教育・研究施設の状態（59%）」、「資格取得教育を重視（58%）」なども回答比率5割以上で、大学の教育特性が校風にも反映されるという認識も強い。

(2) 大学設置別回答、及び回答者属性別回答

校風を形成する要素・要因について、大学設置主体（表10）や、回答者の立場（表11）によって認識の違いはあるのだろうか。

表10 大学設置別：校風を形成する要素・要因（回答数355、全体回答比率50%以上を掲載）

校風形成の影響要因(肯定的回答上位項目)	国立大学 (n=100)	公立大学 (n=55)	私立大学 (n=200)	全体 (n=355)
大学の立地(分散、統合、所在地、など)	82%	82%	81%	81%
教員と学生との距離の近さ	68%	84%	82%	78%
キャンパスの景観	57%	67%	72%	67%
学生(友人、上級生・下級生)同士の交流	58%	58%	74%	67%
地方大学である	78%	78%	53%	64%
地域の人々との交流	60%	75%	62%	63%
実学教育を重視	52%	71%	64%	62%
地域内、県内の出身学生数	59%	65%	57%	59%
教育・研究施設の状態	61%	62%	57%	59%
資格取得教育を重視	31%	65%	70%	58%
卒業生の母校意識	43%	49%	62%	54%

全体回答比率と比べ、国立大学関係者からは「大学の立地（82%）」、「地方大学である（78%）」、「地域の人々との交流（60%）」、「地域内、県内の出身学生数（59%）」などに回答比率が高く、立地や地方性に校風形成の影響を認めている。また「教員と学生の距離の近さ（68%）」、「教育・研究施設の状態（61%）」などの教育的側面も校風形成要素として認識している。全体回答比率より回答比率が低いのは、「実学教育を重視（52%）」、「資格取得教育を重視（31%）」という要因項目である。それが実施されていたとしても、国立大学関係者はそれを校風形成要素・要因とするほどの認識はしていないのだろう。

公立大学関係者回答では「教員と学生の距離の近さ（84%）」、「大学立地（82%）」のほか、「地方大学である（78%）」、「地域の人々との交流（75%）」、「実学教育を重視（71%）」、「資格取得教育を重視（65%）」、「地域内、県内の出身学生数（65%）」などが上位である。地域性と職業性を重視する公立大学の特性がそのまま校風形成要素と認識される傾向がみてとれる。「教員と学生との距離の近さ」の回答比率が高いのは、公立大学関係者回答中、医療系小規模大学の割合が35%を占めていたことの影響とも考えられる。しかし「教員と学生との距離の近さ」について、国立大学でも教員一人あたり学生数比率は低いはずだが、校風形成要素としての回答比率は他よりも低い（68%）。それも国立大学の校風だといえようか。

私立大学関係者は「キャンパスの景観（72%）」、「学生同士の交流（74%）」、「資格取得教育を重視（70%）」といった要素の回答が全体よりも高く、私学校風の形成要素・要因を垣間見る。都市部の設置が多い私立大学ゆえに、「地方大学である」ことの回答比率（53%）は他よりも低い。

教員、職員、卒業生組織、保護者組織といった回答者属性別で校風形成要素・要因の回答比率を確認しよう（表11）。

表11 回答者属性別：校風を形成する要素・要因（回答数355. 全体回答比率50%以上を掲載）

校風形成の影響要因(肯定的回答上位項目)	大学教員 (n=64)	大学職員 (n=202)	卒業生組織 (n=64)	保護者組織 (n=14)	その他 (n=11)	全体 (n=355)
大学の立地(分散、統合、所在地、など)	78%	83%	84%	57%	91%	81%
教員と学生との距離の近さ	73%	82%	77%	79%	45%	78%
キャンパスの景観	64%	65%	80%	43%	73%	67%
学生(友人、上級生・下級生)同士の交流	52%	69%	78%	64%	55%	67%
地方大学である	77%	63%	56%	43%	73%	64%
地域の人々との交流	59%	66%	61%	43%	73%	63%
実学教育を重視	56%	64%	67%	36%	55%	62%
地域内、県内の出身学生数	63%	57%	61%	50%	73%	59%
教育・研究施設の状態	64%	58%	63%	36%	45%	59%
資格取得教育を重視	50%	58%	70%	71%	18%	58%
卒業生の母校意識	44%	52%	70%	57%	64%	54%

教員回答で全体より回答比率が高いのは「地方大学であること（77%）」、「教育・研究施設の状態（64%）」であり、大学の立地や教育研究環境を校風の形成要素と認識している。地方国立大学の教員回答が多かったことも影響していよう。「卒業生の母校意識（44%）」について、教員回答では校風形成要素としての認識度は高くない。母校意識に教員の関心が低いのか、国立大卒業生の母校意識が希薄なのか。今後の検証課題となろう。

大学職員の回答では「大学の立地（83%）」、「教員と学生との距離の近さ（82%）」を校風形成要素として強く認識し、教員回答比率よりも高い。「地域の人々との交流（66%）」の回答比率も他より高い。

卒業生組織回答では「キャンパスの景観（80%）」、「学生同士の交流（78%）」、「資格取得教育を重視（70%）」、「卒業生の母校意識（70%）」など、学生時代に過ごした大学景観や交友関係の記憶等に由来する事項を校風形成要素として強く認識しているのか。「地方大学（56%）」の回答比率は全体に比べて低い。

保護者組織からの回答数は少ないが、「教員と学生との距離の近さ（79%）」や「資格取得教育を重視（71%）」などは、全体よりも高い回答比率だった。「大学の立地（57%）」、「キャンパスの景観（43%）」、「地方大学（43%）」、「地域の人々との交流（43%）」などの回答比率は他と比べて低く、立地、景観、地域性にはさほど校風形成要素を見いだしていない。

5. 校風を実感する契機、状況

(1) 調査設問と回答数

今回調査では、回答者がそれぞれ大学の校風を、いつ、どのような機会に実感したかも設問とした。これにあたり「教育・学習時（大学の授業）」、「研究活動時」、「課外活動・就職活動時」、「大学行事・スポーツの大会、入学試験、マスコミ報道」、「教員・友人との交流」、「景観・立地」、「学生、子弟・子女の成長」、「保護者会」、「卒業後の交流」、「その他」の10領域を提示し、さらにそれぞれ領域に「校風を強く感じた状況や機会」として具体的項目を明示し、選択5件法でその強度回答を求めた。これら領域設定、並びに回答選択肢（実感機会）提示にあたっては「2022年web調査」時に抽出した校風言及結果に基づいている。回答数は355件あり、そのうち国立大学関係者は100、公立大学関係者は55、私立大学関係者は200の回答であった。今回は主な5領域について結果報告する。

(2) 領域ごとの回答状況

①教育・学習時

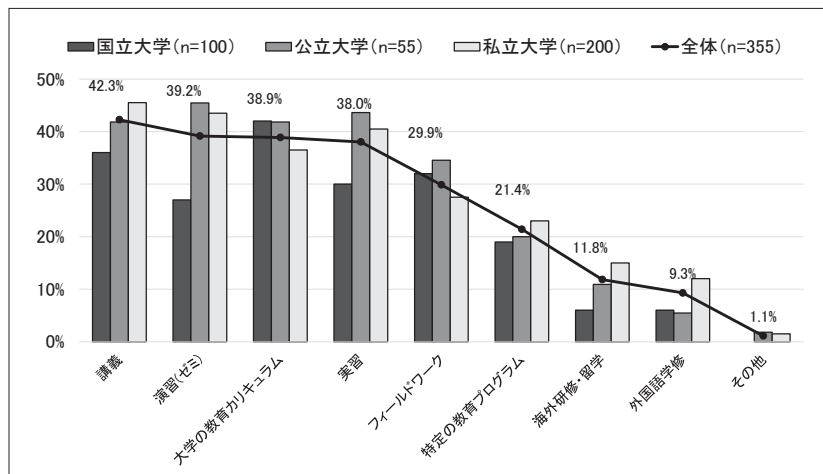


図1 教育学習時での校風を実感する機会

校風を実感する機会として「教育・学習時」に関する回答結果を示したのが図1である。回答全体では「講義 (42.3%)」、「演習(ゼミ) (39.2%)」、「大学の教育カリキュラム (38.9%)」、「実習 (38.0%)」など、平素ごく通常の教育・学習時に校風を感じるという回答比率が4割前後の上位である。大学設置別に見ると、全体回答に比べ、国立大学関係者は教育カリキュラムのあり方、公立大学関係者は演習時、私立大学関係者は講義時に校風を感じるという回答が多かった。この設問では選択5件法で「どちらとも言えない」や「あまり感じない」、「まったく感じない」の回答選択肢も提示していた。にもかかわらず、教育・学習時に「校風を感じる」という肯定的回答をした項目が全体の約4割あった。この集計結果は日々の教育・学修活動も校風形成にもつながっていることの証左とも言えよう。自由記述には、校風を教育活動と意図的につなげようとする以下の事例紹介もあった。

第1回入学式における初代学長式辞で述べられたスローガンや、大学憲章の内容を、現在の取組みと結びつけたスピーチを学長が意識的におこなっている。ディプロマ・ポリシーを校風に結びつけ、それを訴求するセレモニーやパンフレットも作成している。(大学職員, 国立中規模総合大学)

その一方で、医療系大学として独自の校風を形成することの難しさを語る自由記述記載もあった。

勤務している大学では教職員と学生との距離は非常に近いのですが、カリキュラムの都合上、学修以外のイベントが少なく、一体感を感じる機会が少ないように思います。医療系の大学では「校風」を打ち出すのが非常に難しく(国家試験合格など他に優先すべき事項が多いので)、他大学との違いを見出すのに苦労している印象です。開学したばかりで歴史が浅いですので、今後学生が国家試験合格だけではなく、人としての成長を得ることが出来

るような唯一の大学になっていけば、と思います。校風についてあまり考えたことはなかったのですが、本学について振り返る良い機会となりました。(大学教員, 私立小規模大学)

②研究活動時

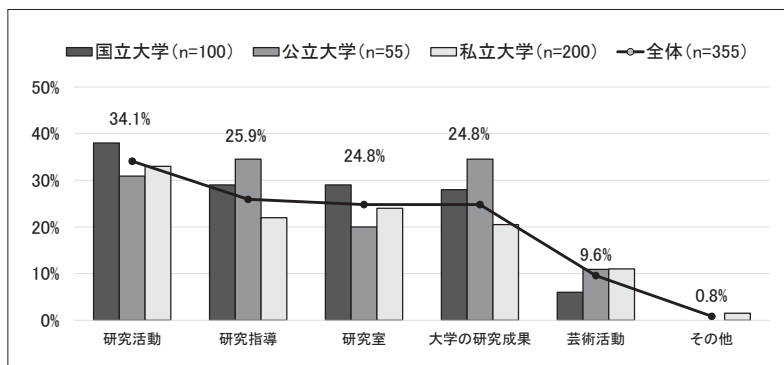


図2 研究活動時での校風を実感する機会

「研究活動時」に校風を感じるとするのは、国立大学関係者の回答比率で高い(図2)。国立大学ならではの校風ともいえよう。公立大学関係者回答では「研究指導」や「研究成果」に校風を感じるという回答比率が高くなる。私立大学において、「研究活動時」に校風を感じるという回答比率は低かったが、「芸術活動時」に校風を感じるという回答はわずかに全体回答比率を上回る。

③課外活動・就職活動時、大学行事等

「課外活動・就職活動時」において校風認識するという回答比率は、私立大学関係者に高い(図3)。今回調査の自由記述でも、あるいは「2022ウェブ調査」でも、課外活動と校風の関係を語る記載は多かった。しかし、国・公立大学関係者の回答比率は必ずしも高くない。国立大学では課外活動時での校風実感機会は少ないようだ。「卒業後の学生支援」の取り組みで校風実感することも、国立大学関係者の回答比率は公私立大学関係者よりも低い。しかし一方で、「地域との関係」で校風を実感するという比率が国立公立大学の関係者回答では高くなる。公立大学・私立大学関係者回答ではボランティア活動、あるいは就職活動時に校風を感じられるという比率も高かった。

課外活動や就職状況と校風の関係を語る自由記述を紹介しよう。

ゼミ、寮や課外活動等をとおして、母校への帰属意識を維持できるかが、「校風」の継承につながるのではと感じます。(卒業生組織, 私立中規模大学)

田舎でおとなしく質素な学校ですが、その分まじめな学生が多く、地元の医療施設に就職し、管理者へと成長していくので地域からの信頼が厚いと思います。(大学職員, 公立小規模医療系大学)

国立大学関係者の回答比率からすれば「大学行事から校風を感じる」という実感は低いよう

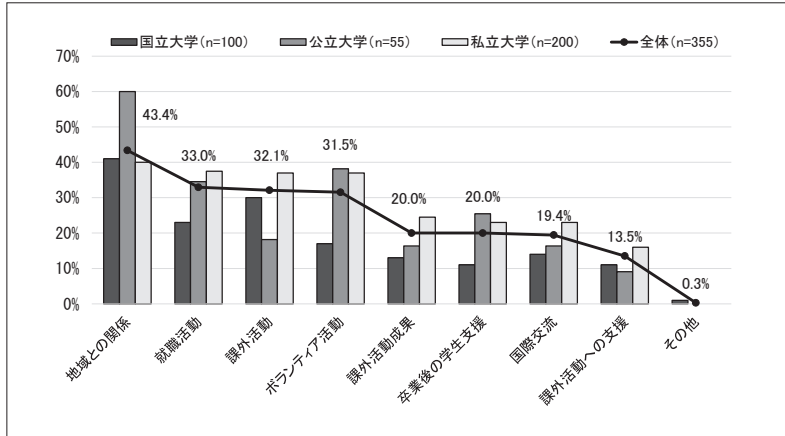


図3 課外活動・就職活動時での校風を実感する機会

だ(図4)。しかし、入学試験の状況や大学がマスコミ等で報道された折、その内容から校風を感じるとした国立大学関係者の回答比率は全体比率より高い。公立大学関係者の回答集計からも「校風を実感する大学行事は少ない」と推察されるが、学園祭は公立大学にとっても校風発揮の重要機会であるようだ。

私立大学では大学式典や大学行事に校風を実感するとした回答比率が他よりも高い。スポーツ大会への参加や応援は、私学にとってまさに校風発揮・実感の場だと言える。たとえば自由記述では「よきライバル校に恵まれ、両者が敬意を持ちつつ、競い合いながら切磋琢磨したことが、それぞれの母校校風にもつながっていたようです。たとえばスポーツの対抗戦、ゼミの交流、あるいは報道での対比的取り上げなどがありました。卒業後の交流もあります。(卒業生、私立大規模総合大学)」とあった。

校歌斉唱の機会がある私立大学では、そこに校風を実感するという回答があるのも特色であろう。一方で「大学の校歌、応援歌を歌える学生が減少しているので、同窓会で校歌復活プロジェクト等を企画し実行せざるを得ない状況。(卒業生組織関係者、私立大規模総合大学)」など、校歌を歌えない学生増加により校風が希薄になったことを嘆じる卒業生組織(会長)の自

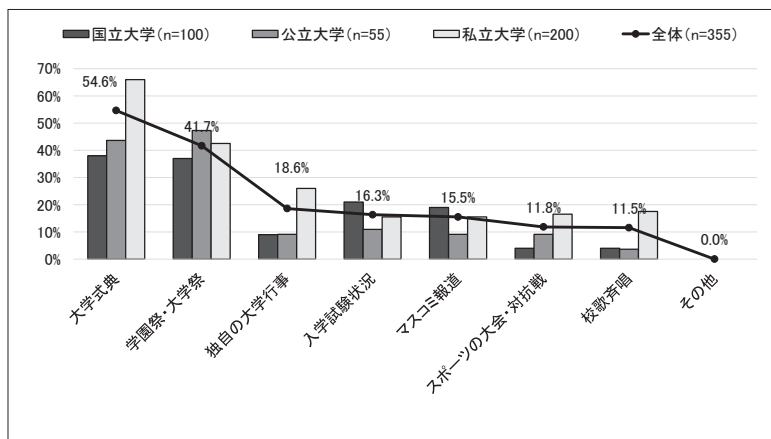


図4 大学行事等での校風を実感する機会

由記述があった。

④教員・友人との交流時

「2022年web調査」では、大学における師弟関係や交友関係の豊富さ、多様さ、生涯の友との出会いなどから大学の校風を見いだす言及が目立ち、なかでも学生や卒業生の発言に多い⁹⁾。今回の調査結果でも、私立・公立大学関係者回答では、教員の指導・支援に校風を実感したという回答比率が高かった(図5)。また、私立大学では、友人、先輩後輩、卒業生など、それぞれの「人的交流」のなかに校風を実感するとした回答比率も高い。自由記述を見るならば、大規模大学ではその交流機会の多さや邂逅する友人の多彩さ、小規模大学ならば人間関係の濃密さやアットホームな教学環境を理由として「人的ネットワーク形成機会の豊富な校風」と認識実感されている。人的交流機会の豊かさから校風実感するという回答は大学職員や卒業生組織に多かった。学生や志願者も人的交流機会に恵まれることを大学に求める。大学運営や教学マネジメントにおいて、はたして「他者との交流機会の提供」の重要性はどれだけ認識されているか。あるいは教員はそれを意識しているか。交流機会の提供工夫は、大学職員や同窓会の知見・発想(アイデア)に期待することも有意義といえよう。

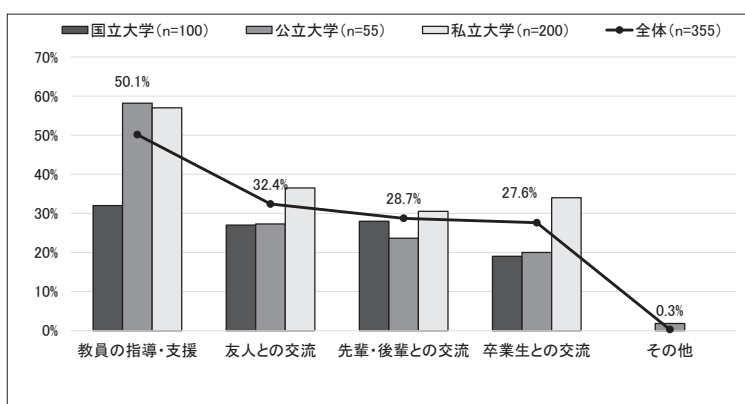


図5 教員・友人との交流での校風を実感する機会

「人的交流」に由来する校風実感について自由記述も多かった。いくつか紹介しよう。

40年前の国立大学はいい意味でも、悪い意味でもおおらかだった。成果主義の現在では生きていけないような教員がたくさんいたが、その先生方との交流が自分の大いなる心の財産となっている。(卒業生組織, 国立中規模大学)

当時、大学は学生に何も干渉しませんでした。もちろん親身な指導や支援ありませんでした。授業で記憶に残っているものは何ありません。しかし、進級判定はなぜか厳しかった。教育研究活動での野放図な環境のもと、学生達は自分たちでサークルを立ち上げ、企画し、学生生活を満喫し、生涯の友を得ました。(卒業生組織, 私立大規模大学)

9) 前掲大川他「アルテス・リベラレス」111号, 292頁

アットホームでこじんまりとした環境で落ち着けました。キャンパスも1つで済み、広さも適度だったので、歩いていれば友人に会えて楽しかったです。公立大学でしたが、全国から有名進学校出身者が多くて刺激を受けました。就職水河期でしたが先輩たちが一流企業に内定もらっているのを見て、意外と評価されていると実感しました。過去の先輩たちが築き上げてきた信頼だと思います。卒業してからも先輩・後輩とたまに会って飲むことが楽しいです。(卒業生、公立中規模大学)

⑤大学立地・キャンパスの景観

「大学の立地や景観から校風を実感する」とした回答比率は、国公立大学いずれの関係者も高い(図6)。卒業生にとって、大学の立地・景観は自らの大学生活の記憶と重なり、大学への帰属意識・愛校心につながる要素となりうる。大学が実施する学生調査や志願者・新生調査では「進路決定の理由」調査を設問に加えることが多く、その回答選択肢として「大学立地」や「キャンパス景観」が並び、進学理由にこれを回答する学生も少なくない。「大学の立地や景観から校風を実感する」という回答比率が高かったことは大学運営や教学マネジメントを考える上でも重要である。「大学立地・キャンパスの景観」の観点で卒業生を対象とした満足度調査・意見聴取をするのも一案である。

立地・景観と校風の関係について、自由記述では以下の記載があった。

歴史と伝統がある大学に所属していて、心穏やかに仕事に向かえるのはキャンパスの美しさにもあると思っています。古い樹木、草花が四季折々にその姿を変え、自然豊かなキャンパスで学生たちが集う姿をみていると校風を感じます。キャンパスの自然図鑑を作りたいと思うくらいです。このアイデアかなり良いと思っています。(大学職員、私立小規模女子大学)」

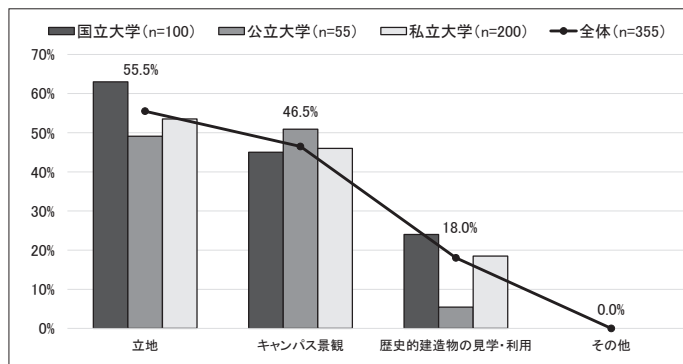


図6 立地・キャンパス景観での校風を実感する機会

6. 継承してほしい校風

本研究では、校風について「歴史的伝統、地理的環境などにも影響を受け、大学の様々な構成員により世代にわたって可塑的に醸成・継承され、ときに刷新される」と考えている。そこで今回調査では、各回答者に「大学や学生に継承してほしい校風」について任意で自由記述の

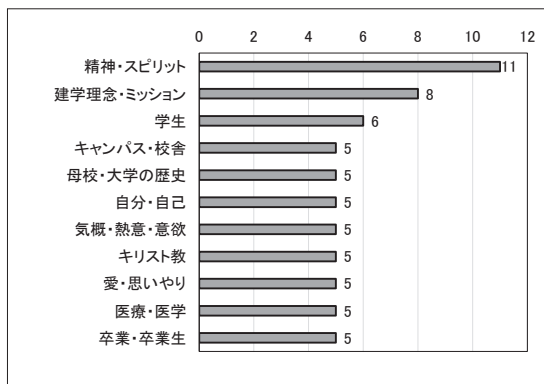


図7 継承してほしい校風（自由記述から抽出した多出領域・語彙. 全回答61）

回答を求めた。

「継承してほしい校風」の設問には61件の回答があった。回答傾向把握のため、自由記述回答をテキスト分析して記載内容の領域分類を試みた。その領域抽出数の上位を示したのが図7である。継承してほしい校風領域にあるものとして「大学の精神・スピリット」、「建学の理念・ミッション」が上位となった。これら記述回答は私立大学関係者のみならず、国・公立大学関係者からの記載にも見られた。また学生達が充実した大学生活を送ることができ、夢ある挑戦意欲を促し、これを支える、そんな自学校風の継承を願う記述や、それを担う学生達へのメッセージも多く届けられた。「気概・熱意・意欲」、あるいは「愛・思いやり」といった価値観や行動規範の校風継承を期待する記載もあった。キャンパスや校舎といった大学の風景、大学の歴史や文化の継承を願う記載も多い。伝統的校風の継承のみならず、さらなる発展に向けた校風刷新・創造を願う記載も散見される。それも含め、それぞれ回答者の立場から「継承してほしい校風」を通じて、望ましい大学の姿が伝えられたようにも見える。以下、可能な範囲で継承してほしい校風についての記述を確認したい。

【建学の理念・精神・スピリット】

- ・大学の教旨。在野精神。（大学職員，私立大規模総合大学）
- ・建学の精神を胸に社会で活躍してほしい。（大学教員，私立中規模総合大学）
- ・不撓不屈の精神。（卒業生組織関係者，私立中規模医療系大学）
- ・ボランティア精神。（大学職員・同大学（同法人中高）の卒業，私立中規模女子大学）
- ・世界市民としての自覚と活動。（保護者組織，私立中規模総合大学）
- ・キリスト教人間観に基づく他者を思いやる校風（大学職員・卒業生，私立中規模女子大学）
- ・卒業生が脈々と語り継いできた「ことば」を大切にし，それぞれの歩む人生の標として，共有し継承して欲しいと願います。（大学教員，私立小規模女子大学）
- ・キリスト教の愛の精神。（大学教員，私立小規模医療系大学）
- ・大学の理念「至誠と愛」，建学の精神「医学の蘊奥を究め兼ねて人格を陶冶し社会に貢献する女性医人を育成する」のさらなる継承。（大学教員，私立小規模医学系女子大学）
- ・本学は医療に携わるための国家資格取得を目的としており，建学の精神である「社会に役立つ奉仕の精神」を養う校風を持ち続けてほしいと願います。（大学職員，私立小規模医療系大学）

【矜持, 誇り, プライド, 気概】

- ・大学の矜持。(卒業生, 私立大規模総合大学)
- ・地方国立大学で学び, 地域のリーダーとなり, 地域を活性化するというプライドを持ってほしい。(大学職員, 国立中規模総合大学)
- ・逆に継承して欲しくないことなのですが, ○大生は自分(自学)を卑下することが多いように感じます。確かに偏差値やレベルの高い大学ではないかもしれないけど, いい大学だなど思っているのだから, そんなに下にして話さなくてもいいのに, と思います。謙虚とはまた違うように感じます。(学生, 国立中規模総合大学)
- ・自ら未来を切り開いていく気概を持って海外留学にチャレンジする校風, ダイバーシティを重んじ, 他社を尊重したコミュニケーションを心掛ける校風。(大学職員, 私立中規模専門大学)

【愛校心・母校らしさ】

- ・愛神愛隣。(大学職員, 私立小規模女子大学)
- ・どの学校でも母校を大事にしてほしいですね。(大学教員, 私立中規模専門大学)
- ・母校歴史や建学精神の認識。ライバル校への敬意。卒業年度を越えた卒業生同士の交流。基礎学力のある「おバカ」を「よし」とする雰囲気。(卒業生組織関係者, 私立大規模総合大学)
- ・女子大なので, 共学では得られない女子だけのまとまりを作っているのだから, それを継承して欲しい。(卒業生組織関係者・同窓会会長, 私立中規模女子大学)
- ・奈良春日山の麓にあるキャンパスでは, 鹿が自由に草を食べている。のんびりとした校風を大事にして欲しい。(卒業生組織関係者, 国立小規模専門大学)
- ・学生の個性を尊重して, 後押しする校風。(大学職員, 私立中規模総合大学)
- ・落ち着いた校風(ちゃらちゃらしていない)。(大学職員, 私立中規模女子大学)
- ・自由闊達。(大学教員, 国立小規模大学院大学)
- ・キリスト教教育。そして地域に愛される大学。(大学職員, 私立中規模女子大学)

【学生への期待, 学生の成長を促す気風】

- ・地に足をつけた学生生活。(卒業生組織関係者, 国立大規模総合大学)
- ・勤勉さと誠実さ。(卒業生組織関係者, 国立中規模総合大学)
- ・やりたい事にとことん夢中になる気質。(大学職員, 私立小規模専門大学)
- ・国際感覚。(卒業生組織関係者, 国立中規模専門大学)
- ・もっと自分の興味のおもむくまま学生生活を送ってほしい。(大学職員, 私立大規模総合大学)
- ・教職員との距離が近く, あたたかい学校という点。(大学職員・卒業生, 私立小規模女子大学)
- ・自己責任に基づく自由な活動。(卒業生組織関係者, 私立小規模医療系大学, (医歯薬看護))
- ・自分の「好き」を見つけとことん追究し楽しむ姿勢と校風。(大学職員, 私立中規模女子大学)

【キャンパス・校舎, 歴史の継承】

- ・校風の軸にあるキリスト教のこと, 創立者の宣教師のことなど, 大学の歴史について知ってほしい。(大学教員, 私立中規模女子大学)
- ・学内に残る歴史的建造物そのものの継承, 建学の精神。(保護者組織, 私立大規模総合大

学)

- ・その場しのぎの、執行部がとってつけたような今風のミッションではなく、歴史的に連綿と受け継いだ使命とは何かを見極め、継承していくことを望みます。(大学教員, 国立中規模総合大学)

【人としての生き方, ありかた】

- ・人間たれの精神を継承し社会に貢献して欲しい。(卒業生組織関係者, 私立小規模医療系大学)
- ・人間愛の精神。(大学職員, 私立中規模総合大学)
- ・マナーを守れる人材として成長してほしい。(大学職員, 私立中規模総合大学)
- ・建学理念「大学は学問を通じての人間形成の場である」を常に念頭に置き実践してほしいと願っています。(保護者組織, 私立中規模総合大学)
- ・社会的弱者に寄り添う姿勢, 行動力。(大学教員, 私立小規模女子大学)
- ・人を想う。人と輝く。(大学職員, 私立小規模医療系大学)
- ・他を慈しむ心。(大学教員, 私立小規模大学)
- ・思いやりの心(あいさつ, ゴミのないきれいなキャンパスにも通じていると思う。来訪者を学生が部署まで案内してくれる。(大学職員, 本学卒業生, 私立中規模介護・福祉領域系大学)
- ・在学時から社会人になっても, 人間たれの精神を持ち続けたり思い出したりできれば良いと思う。(卒業生組織, 私立小規模医療系大学)

【教育・研究, 課外活動, 大学行事】

- ・気象や災害などの困難を克服しうる実学を目指した研究と勉学。(卒業生組織関係者, 国立中規模総合大学)
- ・平和で学習できる環境を育む心の育成。(大学職員, 私立小規模専門大学)
- ・実学と高度な専門性を重視した校風。(大学教員, 国立小規模大学)
- ・学理と実際の調和を重視する校風。(卒業生組織関係者, 国立大規模総合大学)
- ・服飾造形に関する感性と表現技術の継承。(卒業生組織関係者, 私立小規模専門大学)
- ・ボランティア系サークルが多い特長は継承してほしい。さすが医療系, 「人のためになる」精神の学生が多いと思った。(大学職員, 公立小規模医療系大学)
- ・教育に対する熱意と努力を大切にする校風。(卒業生組織関係者, 国立小規模教員養成系大学)
- ・建物を一から作り上げて開催する大学祭。(卒業生組織関係者, 私立中規模芸術系大学)

【地域や街との共生】

- ・学ぶ街は, 暮らす街でもある。(大学教員・役員, 国立中規模総合大学)
- ・地域社会への貢献。(大学職員/卒業生, 私立大規模総合大学)
- ・大学の所在地の西巢鴨から巢鴨までの商店街を含むエリアをオールキャンパスとして, 学生が活動すること。(大学職員・同窓会組織兼任, 私立中規模総合大学)

【校風継承にあたっての課題】

- ・本学では建学者である初代学長の意思に基づき「自由自治」を強く謳っている。入学式で配られる建学の理念を示す小冊子にもそのことは示されており, 学内には自由自治の石碑を置いている。学園祭でもその意識はあったものの, 近年の学生の意識の変化などもあり, 弱まっている。(大学職員, 私立中規模大学)
- ・私立大学の建学の精神が国の政策により, また少子化により存在感がない状態に陥ってい

る現状への危機感がある。すべてが同じ学生を育成しようとしている。(大学職員, 私立小規模大学)

- ・本学に関して言えば「自由な校風」であるゆえに群れることを嫌い、体験した学生生活への愛着や思慕は生まれても、そこから大学への帰属意識につながるものが困難に思う。そのような学生の意識は好ましく思いながらも卒業後も大学そのものへの愛着を持ってもらうためにはどのようにすればよいのか、悩ましく思っている。(大学職員, 私立中規模大学)
- ・国立大学にしては、校風が明確です。そのことに気がつく学生は少なく、校風を示唆する教員もいません。卒業生(組織)が校風継承に重要な役割を担っています。教員に本学出身者が少なく、母校意識もなく、あわよくば「転任」してしまう現状で、教員が校風継承の役割を担うことは困難かもしれません。教員も執行部も、校風などには無頓着です。(大学教員, 国立中規模大学)

【校風を創る】

- ・「大学校風」は、学生によって創られることを実感しています。大学の理念、建学の精神など当然教職員が共有したうえで、学生をどう育てていくのか議論し続けていました。結局、在学生在が何を成してきたか、卒業生がどう活躍しているのかが答えになっていたように思います。現在、歴史と伝統を掲げる大学に所属していますが、「うちの学生は、優しい、穏やかな雰囲気がある(ポヤポヤしているなど言います)」であるとか「うちの卒業生らしい」とか教員同士でよく話をします。歴史や伝統など重たいもののように感じますが、そこに、学んできた人たちの醸し出す雰囲気のようなものが目に見えない形で「校風」となっているようにも感じます。もちろん、それが、理念とか建学の精神だとかを体現化したかたちなのかもしれません。(大学職員, 私立中規模女子大学)
- ・本学は2007年に開学した比較的新しい大学であり、開学後も順次医療系の学科を設置し続け規模を拡大してきました。学科によっては卒業生が少なく、教職員も近年本学へ赴任・就職された方が多く、全学的に統一された校風・共通認識の定着は、まだまだ発展途上ではないかと思えます。今後歴史を重ね、卒業生が本学教員として就職するケースや教職員が大学へ定着することで大学校風が徐々に形づくられるのではないかと思えます。(大学職員, 私立中規模大学)

7. おわりに (調査のまとめと得られた知見)

今回調査は、あえて回答を一組織一回答に制限せず、大学教員、職員、卒業生組織・卒業生、保護者組織・保護者、学生など、幅広い大学関係者に依頼した。そうすることにより、大学関係者が、それぞれの立場で、いかなる大学校風を、いつ、どのように認識しているか、そして校風継承に何を望むか、等の活きた回答を期待した。それゆえ今回調査結果が緻密なデータ分析にはすぐわない集計だと承知する。それでもしかし、曖昧だった大学の校風輪郭や形成要因などが浮き上がってきた。

今回調査によって、あらためて各大学にそれぞれの校風があることを確認した。また、大学に関わる立場によって校風認識に違いがあることも把握した。とはいえ、回答者が認識する校風傾向は、国立、公立、私立といった大学設置類型ごとに社会一般が抱く「校風イメージ」とある程度一致していた。国公立大学は、校風として示される特色や意識が希薄と言われる。私

学とは違い、大半の国公立大学では、建学の理念や創設者に由来する校風を形成することはたしかに困難である。しかし、教育・研究活動や地域貢献・協働活動に、それぞれの大学特性を踏まえて発揮することが出来るし、その取り組みがやがて各大学の校風形成に繋がっていく。あるいはそうして蓄積・醸成された気風や価値観が次代の大学創造・発展の基底ともなる。校風とは、際立って顕著な大学特性やそこでの価値認識だけを言うのではなく、立地や歴史、構成員によって平素の営みから意図せず蓄積形成されて「大学をある方向性に動かしていく自覚的・無自覚的な働き」である場合も多い。「本学には校風といったものはない」、「校風のことなど考えたこともない」という回答もあった。しかし、それ自体が「その大学の校風」ともいえるし、見えにくい校風の中でその大学ならではの営みがなされているに違いない。

継承してほしい大学校風について、自由記述では「大学の精神・ミッション・建学の理念」といった項目が様々に語られていた。「大学の矜持・プライド」、「愛校心」、「母校らしさ」なども継承してほしい校風と語る回答もあった。建学の精神は必ずしも校風と一致するものではない。しかし、そうした有形無形の「スピリッツ」は校風の礎石となり、何らかの形で学生それぞれの大学生活や生き方の中に反映されるだろう。校風に拘泥せず、むしろ刷新することに意義を見出すという回答もあった。たとえば「大学の歴史や伝統が校風に反映され、それを継承していくことが今までの在り方だったかもしれないが、時代は変わり学生数も減少していく中、それに固執するよりも時代やその時代の学生の資質に合わせた校風に変容させていくことがこれからは大事なのかもしれないと思う。(卒業生組織、私立中規模大学)」という記述や、「建学の理念が継承されながら、時代にあった大学の長が、校風として感じられるのが何よりだと思います。不思議なことに、学生の雰囲気からが最も校風を感じられますが、そこを育成する教職員からは、「建学の精神」を忘れがちになり、早急な成果を求められる研究等・業務の在り方向き合い方の価値観に、校風が隠れてしまっているような気がします。校風をどう実施していくとよいのか、難しい限りだと感じます。(大学職員、私立中規模女子大学)」という記述もあった。

校風は大学の財産である。継承するにしろ、刷新するにしろ、大学の個性としての校風が形成されているのならば、それを基盤とした様々な事業や取り組みの可能性がある。

今回調査では「校風としての自由」をめぐる大学関係者の考えや、大学校風に関与した事業紹介の回答も収集した。また、校風に関わる回答に合わせ、各大学の歴史や規模、あるいは大学特性（たとえば総合大学、単科大学、女子大学、地方大学など）も把握した。そうした個別詳細の視点から今後も分析検証を実施し、それを報告する予定である。

ARTES LIBERALES

BULLETIN
OF
THE FACULTY OF HUMANITIES AND SOCIAL SCIENCES
IWATE UNIVERSITY

No.113 December, 2023

OKUNO, Masako: The influence of clinical psychologists' views on life and death toward the way of their supports; From a survey of qualified counselors	1
KIMURA, Naohiro: Artification of TV Series: A Case Study of Episode 152 of 'Amachan'	19
SAITO, Shinji: Joseph Campbell on the Grail Myth.....	59
Jim SMILEY: Language inference pedagogy through games: Surveying levels and attitudes	71
HIGUCHI, Tomoji: A Study on Fujiwara -no- Motohira (藤原基衡)	87
MOTOMURA, Kenta: Thinking of Haptic-Visual Basic Design & Art: Deconstructing Bauhaus Mythology and Johannes Itten	119
OKABE, Yuka: Reprint of "Utsunoyama-kocho-monogatari" Vol.2	133
SUKITA, Tomohiko: Chapter titles of Manchu Translation of Xiyouji (滿文西遊記) preserved in Osaka University.	159
HASEGAWA, Yumiko: Does distance perception ability of golfers affect their motor control: An attempt to measure individual distance perception using a visual analog scale.....	179
SAITO, Shoichi: Survey of Marx's Theory of Labour Wages —Reach of Orthodoxy and Uno School—	197
TSUKAMOTO, Yoshihiro: The Environmental Conservation and Disaster Prevention Based on the Cooperations, Interrelations in Basin and the Coronavirus Confusion : From Latest Trends around the Kitakami River System	209
MARUYAMA, Hitoshi: The Hope named Sustainable Tourism; Towards the Realization of Sustainable Regional Society	233
TAKAHASHI, Kouichi: Establishment and Development of Floor Plan of the Traditional Houses in Iwate Prefecture and its Regional Development : Mainly three-column type (II)	253
OHKAWA, Kazuki & ONO, Ken-ichi & SHIMADA, Toshiyuki: Survey and study on perceptions of school culture at universities and expectations for its succession. (Based on a nationwide survey of university personnel) ...	271